

## 文献紹介

泉佐野市史編纂委員会編：

『新修泉佐野市史 第13巻 絵図地図編』

泉佐野市 1999年3月

A4判 解説299頁 絵図集92頁

別録(絵図地図)9枚 10,000円

本書でまず特筆したいのは、被差別身分呼称に関する記載のある絵図をも、それぞれの図に解説を加えながら掲載していることである。このことについては、凡例でもふれられ、さらに総説では、「絵図における身分呼称の記載について」と題して約6頁をさいて、差別が非科学的なものであることを訴えている。筆者も、福井県史や県内外の市町村史の絵図史料編にかかわった経験があるが、いずれについても、この問題で頭を悩ませた記憶がある。泉佐野市においては、この問題を回避することは、同市域を示す絵図・地図で最も古い「日根荘日根野村荒野絵図」の複製を断念することにつながる。そのため、前向きに検討した結果が本書での扱いになったのであろう。従来も文書史料集における被差別部落やその身分呼称に関する史料の複製は多数みられたが、場所を特定できる絵図・地図史料の複製に関しては、おそらく本書が、本格的にこの問題に取り組んだ最初の本ではないかと思われる。編纂委員長であり、中世の絵図の解説も担当している小山靖憲氏(帝塚山大学教授)や本巻の監修者出田和久氏(奈良女子大学教授)、総説の当該部分の執筆者藤本清二郎氏(和歌山大学教授)はじめ、市当局の英断を評価したい。本書は同市史の第1回配本になるものであるが、今後刊行される同市史の通史編や史料編などにも、この精神は受け継がれるものと思う。

ついでながら、同市史の構成は、通史編3巻、史料編5巻、別編5巻の計13巻である。本書がその第13巻にあたる。

さて、本書は、解説・絵図集・別録の3部からなり、A4判の書籍用ケースに収められている。解説・絵図集は書籍の形態をとり、別録の9枚の図は簡単な帙にA4判に折り畳まれて入れられている。

解説は、総説と各絵図地図の解説(解題)から

なる。総説は「泉佐野市域の絵図・地図」の内題があり、「地図の始まりと地図で表現する意義」という序論から始まり、「日本古代の地図」「中世の地図・絵図」「近世の絵図」「近現代の地図」「絵図・地図と地名」そして先述した「絵図における身分呼称の記載について」から構成され、注も含めて40頁のボリュームがある。このうち、収載された図が最も多い「近世の絵図」に23頁余があてられている。

解説の構成は、「絵図」と「地図」に大別され、「地図」には「地形図・空中写真・衛星写真」「自然地理図」が分類され、それ以外は「絵図」に分類されている。地形図は、明治19年・20年測量の仮製2万分の1地形図が80%に縮小されて別録に収められているほか、明治41年・42年の図から平成6年・8年の図まで6枚が約3万5千分の1にしてすべて白黒で掲載されている。空中写真は昭和22年から平成9年撮影のものまで4枚、そのうち新しい2枚はカラーで複製されている。衛星写真は1997年のもの1枚がカラーで収められている。

一方、「絵図」は中世荘園絵図(2点)、国絵図・国絵図関連絵図(8点)、村絵図・町場絵図(9点)、山論絵図(3点)、水利絵図・田地開発関係絵図(12点)、浦浜絵図(4点)、その他の近世絵図(4点)、近代絵図・地籍図(6点)に分類されている。ほとんどの絵図・地図は別冊の絵図集にオールカラーで収められているが、歴史的に特に重要な中世荘園絵図2点は別録に縮小率約65%程度の大きさで複製されている。また、近代絵図・地籍図のうち、「日根野村土地利用図」「上之郷村土地利用図」の2点は、明治19年の地籍図から復原したもので、これらも土地利用が色分けされて別録に収められている。

その他、別録に収められている地図には、「泉佐野とその周辺の地質図」「泉佐野とその周辺の地形分類図」といった地形・地質関係の地図のほかに、ユニークな地図として「泉佐野とその周辺の等高線図」がある。この図は昭和36年から43年にかけて大阪府から発行された3千分の1地形図から等高線だけを抜き出して作成されたもので、

等高線以外には、主要交通路と主要河川・溜池が記されているだけの地図である。今後、小地形の研究などに活かされる地図ではないかと思われる。別録の最後には附図として「泉佐野市ベースマップ」と称する1万5千分の1の地形図がある。内題は「泉佐野市全図」となっており、本書のために新たに作成された地図である。山地部分には尾根や谷がよくわかるように陰影が施されており、なかなかきれいな仕上がりである。この図をはじめ別録に収められている作成地図の作図を担当したのは、この種の仕事に定評がある森図房である。森図房は後述するトレース図の作成も担当している。

次に最も多くの絵図が複製されている近世絵図に目を移そう。国絵図は、市町村史誌類にありがちな当該市町村域のみを複製するのではなく、当該絵図全体を複製し、泉佐野市域については、文字の判読が可能な程度に拡大して別に収めている。このように全体図と部分拡大図の併用は、全体図では文字が判読しにくい詳細な記載のある村絵図の一部でもみられる。「鶴原村全図」「上瓦屋村全図」がそれである。ただ、一つ疑問に思ったのは、図番5の「和泉国分間絵図写」の法量が、たとえば「縦一六五・五(一六八・〇)」のように、( )内にも書いてあることである。裏打ちしてある絵図の裏打ち紙の法量かと思ったが、複製図で裏打ちされていることが明らかな中世の絵図には、この記載がない。また、図の一方と他方で法量が異なるのなら、近世のほとんどの絵図は完全な長方形ではないので、すべての絵図にこの記載がなければならないと考える。他の絵図には見ら

れず、本図だけに見られるもので、( )内の法量の意味が凡例にも記されていない点、やや残念である。

しかし、ほとんどの複製図は写真のピントがしっかりしており、印刷のズレもほとんど見られず、文字の判読が可能である。写真撮影を担当した便利堂、印刷を担当した河北印刷の技術の高さが感じられる。

このように、本書は絵図・地図研究者のニーズに十分応えている。また、それだけではなく、本書は泉佐野市史の中の1冊であり、一般市民にも利用されやすいように工夫されている。

その一つは、近代絵図・地籍図の一部を除き、筆で描かれた絵図については、すべての絵図について、トレース図を解説に収め、文字を活字化していることである。一部の絵図について、トレース図を付したものはよくみかけるが、すべての絵図にわたるものは本書が初めてであろう。また、解説は、地元住民が親しみやすいように、具体的な地名を多く取り入れたり、当該絵図の描く範囲に相当する部分の現代の地形図を掲載したり、現代の風景写真も挿入するなどの工夫がなされている。さらに、文字の大きさも、この種の書物の読者層である高齢者に配慮して、写植の級数で15級と比較的大きな文字を使用し、難読地名・用語にはふり仮名が付されている。これらからは、泉佐野市史の第一回配本として、市民に親しまれるものをつくらうという編集者・市当局の意気込みが感じられる。

(海道静香)